

友よ！ 私たちは忘れるまい  
この激しい混沌の中で、生命をかけた  
闘った君の姿を 私たちは忘れるまい

# 叛乱者集団

日本大学 理互学部 一反乱者集団 - 機関紙、情報紙  
1970-10.19 第5号

## すべてを運動を自主シンポジウム運動へ！

我々はあの激烈な日大破壊の闘いをうけていく中で、自らが存在する大学における、そしてそれが大学として存在する社会にある共同幻想そのものを我々は大学解体の闘いの中から明確にうちやぶって来た。すなわち我々にと、て大学など存在したとしても、くまかたとしても同じ運命だ。それを唯一問題にするのは大学側=教員局であり彼らは大学の存在をきとめる中で論理を立てる。すなわちそれは全共闘Mの高揚時期において、自らの存在についての過激な一応程度を立札をがらをそれが停滞してくる中で、そのように自己の存在を否認する事は観念でしか言いなると言いきるが、また以前の状態へとどっている。我々はそれらを状況を否定的に見ていく中で70年代の闘いの一切の出発点を大学解体(⇒国家解体)の論理に求める。それは自己が存在している中で、自己が徹底的に管理され抑圧されている事に対する根底的な闘いをやり始めて行かなくてはならない。大学解体の論理が単に観念的に終ってしまっただという事でそれを切っていく学友に対し、我々はそれを明確に否認し始めていく。そして我々は、その解体の論理をふきえて明確に具体的なものの方針を出して行くであろう。そのような大学解体の具体的なものとして、我々は現在身近に存在している教授、教員に対する徹底的な過激な闘いを、ていかなくてはならない。それと同時に現存の学生管理

するものとしてある授業、試験等々の管理枠を解体し始めていく闘いを行なっていくことは否定的なものである。また単にそのような弾性に対するものとして我々は自主シンポジウムを提起する。そしてそのような闘いを通して、現在着々と行なわれつつある大学管理体制の強化の政策(日大における3ヶ年計画)に対する闘いを我々はやり始めていかなくてはならないであろう。

我々の自主シンポジウムというものは単に勉強会というものではないし、また単に新たな方向性というものを創出するものでもない。我々はそれら両方を一つの反権力の闘いとして意識づけよう。

そのような中で10.21国際反戦デーの闘いをそのような方向性をもちえる中で、明確に我々の反権力、大学解体の闘いの質を出して行かなくてはならないであろう。

- 大学管理体制解体 - 国家解体
- 連続自主シンポジウム貫徹
- 10.21 国際反戦デー 闘争貫徹
- 叛乱勝利

## 10.21 日聖元決起集団に結集せよ！

黒ハル集団7号館前(PM12:00)集団 → 理互6号館前(PM12:30)集団  
→ 1号館内集団貫徹

大学解体 = 日帝管理体制打壊に向けて、すべての学友は国際反戦デーに元決起せよ！